7/11

資料９：学級通信

平成20年度 岡崎市立南中学校 2年8組 学級通信

21号

ひなた

感謝
思いや
助け合い

こんな気持ちで生きていきたい

～昨日の道徳の授業 仲間の声より

- 命を大切にしていきたい。今まで私にかかわってきた人たちに感謝し、これから私とかかわる人たちのことを考えて自分や相手を大切にしたい。
- 百万人の命の分まで、一生懸命生きて、またつぎのバトンをまわしていきたいと思います。次のバトンをうけつぐ人たちも、それくらいの命の重さを感じつつ、次のバトンをまわしてほしいと思いました。また、人にめいわくをかけず、思いやりを大切にしたいと思いました。
- 関わってきた人や自分のためにも後悔しないように精一杯がんばって生きていこうと思う。そして生きていてよかったと言えるようにしたい。
- 過去無量のいのちのバトンを受けついだ以上、次の人にもいのちのバトンをつなげていく必要がある。
- 自分の命を大切にして生きる。つまり簡単なことでつまづいて死ぬと思わず前向きに生きていく。
- 毎日がとても幸せで、楽しく生きていきたい。どんな事がおきても友達を大切にして、いやな事があってもめげずにしっかりと生きていきたい。
- 交通事故に気をつけて生きていきたいと思った。自分が生まれるまでにすごい人たちがいるので、それを大切にして生きていきたいです。
- 命は大切にしていかなければいけないと思うので、これからも夢や希望を持ってしっかりと生きていこうと思います。それに自分の命はもちろん大切だけれども、他の人の命も同じくらい大切なので、周りの人のことも思いやり、人間は1人では生きていけないので、助け合って生きていきたいです。
- いろんな人達のおかげで生まれてこれたのだから、両親とか、祖父母の言うことをしっかり聞いてちゃんと生きて、次の命にまわそうと思う。
- 楽しいことつらいことがあっても命をすてずに、人生を一歩ずつ精一杯、大事に生きていきたいと思う。
- ほこりに思って生きていきたい。私に命を与えてくれた人たちに感謝して生きていきたい。

中学校部会（２年）
南中学校　　中川　友紀

研究テーマ

心豊かに、たくましい未来を拓く道徳教育　～自他の命を大切にしようとする心を育む～

研究概要

（1）はじめに

人と人とのつながりが希薄になっている現在、日本では時代を象徴するような事件がたくさん起こっている。事件を起こした理由は、「誰でも良かった。むしゃくしゃしていた。」と共通した言葉が聞かれる。『命の重さ』を感じていない発言ばかりである。また、学校生活での生徒たちの言葉に目を向けてみると、「うざい。死ね。キモイ」と相手を傷つけることを口癖のように、平気で言ってしまうことが多い。また、４月に生活アンケートを行ったが、右の結果から分かるように、自分さえ良ければ、相手が苦しんでいたり、傷ついていても構わないと感じている生徒がいることが分かった。

４月生活アンケート調査より
- いじめはあっても良いことだと思いますか
  はい・・・9人　いいえ・・・30人
- 廊りにいじめられている人がいたらどうしますか
  やめさせるように努力する・・・13 人
  相談する・・・18 人
  知らないふりをする・・・7 人
  自分もいじめる側についてしまう・・・1 人

このような生徒たちに、相手のことを考えられる心を育み、共に協力をして生活することの大切さを感じて欲しいと思った。このような相手を大切に思う気持ちが、自他の生命を大切にしようとする心につながっていくと考えた。

私は、自他の生命を大切にするということは、人が共同社会を構成していく上で最大の定義であると思っている。共同作業や意見交換を通じて自分を見つめ直し、相手の良いところを発見していくことこそが基盤となると考える。そこで、一学期の道徳の授業を１つの大きな単元と考えた。エンカウンターを取り入れ、協力することの大切さや相手の良いところを発見する場を多く取り入れる。単元の終わりに、相田みつをさんの「いのちのバトン」を題材として、いのちを大切にするための心を育むための授業を行い終結とする。

（2）研究の視点

①学級の実態に合わせた単元構想

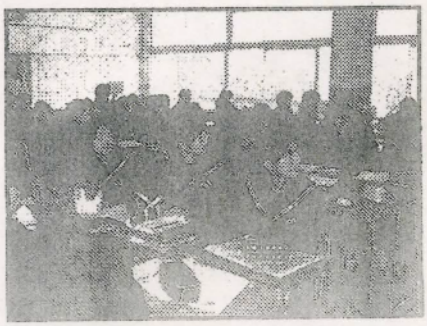
生徒の実態
① 自分さえよければいいという自己中心的な言動や言葉が見られ、相手の気持ちを考えることができない。自分の好きなことや楽しいことしか積極的にやろうとしない。
② 学級の場で自分の考えを述べることに抵抗を感じ、意見交換をすることができない。

仮説
共同作業や自分の考えを発表する場をたくさん与えることにより、少しずつ発表することへの抵抗感がなくなっていくであろう。何度も行うことで、自分とは違う相手を受け入れ、認める心を育み、相手の喜びや悲しみを共有できるようになるであろう。その心が自他の生命の尊重につながっていくと考える。

【エンカウンターを使っての取り組み】
① 新聞タワー
新聞を折ったり、ちぎったりして積み上げる。
② 広告パズル
２０ピースにちぎられた広告を完成させる
③ すごろくトーク
さいころで出た目の数進み、指示された内容を話す。
④ 友達の良いとこ探し
友達の良いところを探し、相手に伝える。

生徒の実態を把握し、５月の段階からエンカウンターを始める。楽しいことしか積極的にやろうとしない生徒たちに対して、体を動かしながらグループで協力をして活動できるエンカウンターを選んで行う。活動後は、必ずワークシートにエクササイズをして自分や友達のことで気づいたことを書く。その後、シェアリングの時間をグループで与え、自分の意見を発表する場を与える。

【エクササイズ後の授業の感想から】
・みんな積極的に参加できたと思います。りなさんが良いアイディアを出してくれました。
・健人君が想像以上に積極的に動いてくれた。
・ひろしくんはやる時はやる人だということが分かった。
・こういう時に協力してくれるのが誰だか分かった。
・積極的にどんどん積んでく人や、メチャクチャ燃えてた人や、近くからニコニコ見つめる人など、色んな人がいることが分かった。



りません。自分が生まれるためには何人の人が関っていますか」と生徒に質問の投げかけ、展開へと入っていった。

発問１：「過去無量とはどんなことを意味しているのでしょうか」

【資料２：発問１に至るまでの授業記録】
Ｔ４：　自分が生まれるためには何人の人が関っていますか。
Ａ男：２人
Ｔ５：　では、お父さんやお母さんが生まれるためには、何人の人が関っていますか。
生徒：４人
Ｔ６：　その上の、おじいちゃんとおばあちゃんが生まれるためには？
生徒：８人
Ｔ７：そうだね。では、今からみんなにある詩を読んでもらいたいと思います。
（　Ｙ太の詩の朗読を聞く　）
Ｔ８：この詩の中にある過去無量とはどんなことを意味しているでしょうか。
生徒たちは、　静かに考えている様子であるが意見をいう者がいない。

導入後の質問に対して、生徒は「2 人、4 人、8 人」と返答をした。その後、過去無量を表す図の拡大したものを黒板に貼付し、視覚的に過去無量の意味を感じさせるよう手だてをはかった。しかし、「過去無量とはどんなことを意味しているのでしょうか」という発問に対しては、まったく意見が出てこなかった。

そのため、「4 代前は何人になるか計算してごらん」と質問をした。計算の得意な子は計算をしていた。そして、「１０代前では、1024 人。数えていくと 20 代前では１０４８５７６人になるんです。室町時代まで遡ることになります」と付け加えた。

発問２：「過去無量のいのちのバトンを受けたあなたは、どんな気持ちですか」

【資料３：発問２に対する授業記録】
Ｔ１２：　「過去無量のいのちのバトンを受けたあなたは、どんな気持ちですか」
Ｙ男：「自分が生まれるまでに、たくさんの人が関ってきていると思いました。　」
Ｔ１３：　「ありがとう。他にどんな気持ちがありますか」
（挙手をするものがいないため、指名する）
Ｉ子：うれしいし、びっくり。
Ｋ勇：責任を感じる
Ｔ１４：うれしいと感じた人は？（ほとんどの生徒が挙手をする）

過去無量とはどういうことであるのか意見が出てこなかったが、発問２に対しての気持ちをワークシートに書くことができれば、生徒たちは過去無量がどういうことか感じているか把握することができた。

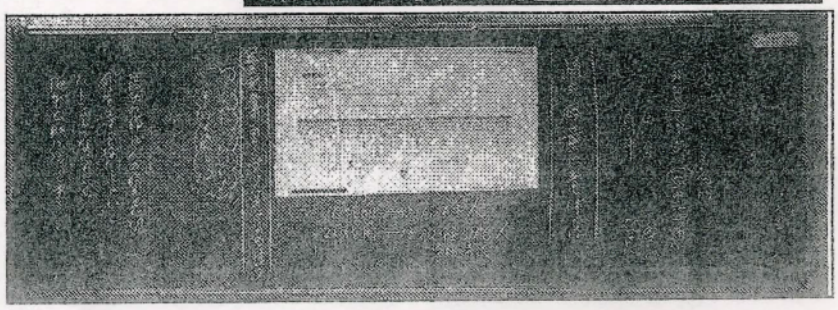
積極的に挙手をし、発言することができなかったが、3 人の意見の発表に耳を傾ける様子がうかがえた。また、自分と同じ意見に対して挙手をし、授業に参加をする態度を見せた。ワークシートに書かれた生徒一人一人の気持ちや、挙手をする姿勢から、確実に過去無量のいのちの重さを感じていることが分かった。

発問３：「今生きている自分の番を、どんな気持ちで生きていこうと思うか」

発問２から、過去無量のいのちのバトンを受け今を生きていることを感じている生徒たちに、発問３をした。たくさんの人がバトンを受け継いできてくれたからこそ、今の自分の命があるという命の重さの余韻に浸っているように感じた。そこで、発問３をした後、ワークシートに自分の思いを書く時間を８分与えた。

静寂の中、生徒たちは、すぐに黙々と自分の思いをワークシートにつづっていった。その様子から、大切な命を無駄にしてはいけないという生徒たちの気持ちが伝わってきた。

記入後、ワークシートに記入したことを発表するように生徒に問うたが、挙手をするものはいなかった。そのため、机間指導の際にチェックしておいたＳ子に発表をしてもらった。



「自分の命も人の命もこれからは今まで以上に大切にしていく。何万人もの人がかかわってもらった命を奪う権利は誰にもないと改めて思った。この命のバトンをとださないように、これからの人生を生きて生きたい」

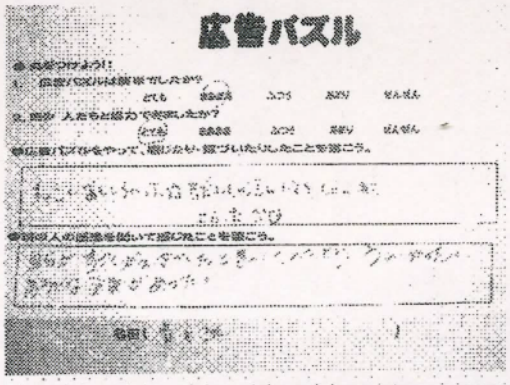
Ｓ子の発表後、時間が来てしまい、授業の感想を書いて終結となった。

5　成果と課題

（1）学級の実態に合わせた単元構想の工夫について

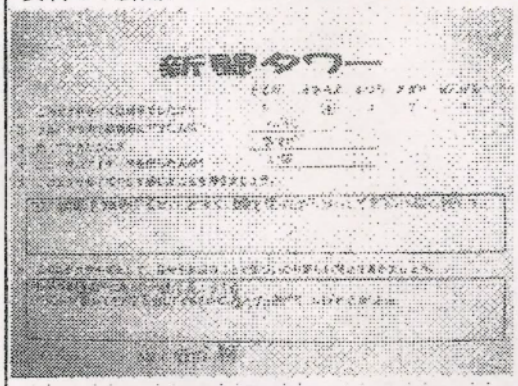
①エンカウンターについて

資料４：広告パズルワークシート



４月に学級開きを行ったあと、生徒たちと過ごす時間は朝と帰り、給食の時間、授業があったが、担任として気になったことは、「積極的に自分の意見を言う生徒が少ない」ということであった。中学２年生は、目標を見失い無気力になり、発言することが「めんどくさい」と思ったり、間違えたら恥ずかしいという気持ちをもったりする時期である。しかし、自分の意見を相手に伝えたり、自分と違う相手の意見を聞いたりすることは、自分自身が成長していくうえでとても大切なことである。そのような、「意見をいえる雰囲気」を作るために、本時にいたるまでに、４回エンカウンターを行った。本時での授業記録からも分かるように、正解が分かっている問いに対しては、生徒たちは自分の意見を言えるようになった。しかし、自分の思いを発表するといったような、はっきりとした正解のない問いに対しては、積極的に意見を言うことができなかった。エンカウンターを数回行っただけでは、成果は表れなかったが、自分の考えを相手に伝える場を作るためにも、これからも継続して行っていきたいと思う。

資料５：新聞タワーワークシート



②資料について

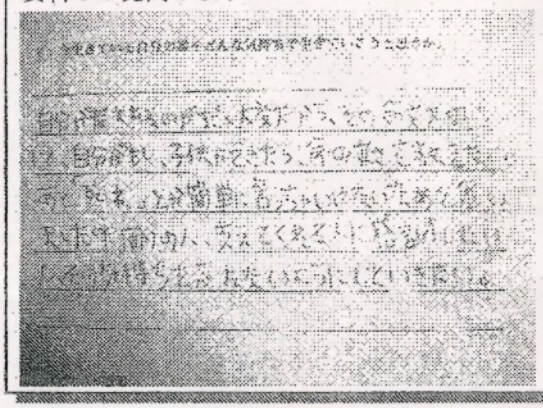
アクションプランには命に関しての指導案がたくさん掲載されていた。その中から、今回の題材を選んだ理由として、生活アンケートや生徒の実態をふまえ自分が生まれるまでに、たくさんの人がバトンを受け継いでくれたおかげで、今の自分の命があるという命の大切さを感じて欲しいという考えからであった。そして、その命は自分だけではなく相手のものも大切であると感じることで、相手を思いやって言動できるようになって欲しいという願いがあった。

7月生活アンケート調査より

- いじめはあっても良いことだと思いますか
  はい・・・4人　いいえ・・・35人
- 周りにいじめられている人がいたらどうしますか
  やめさせるように努力する・・・13人
  相談する・・・20人
  知らないふりをする・・・5人
  自分もいじめる側についてしまう・・・1人

本時までの実践を終え、終業式間近に７月生活アンケートが行われた。その結果が資料６から分かるように、質問に対して前向きな回答の割合が増えていることが分かった。また、資料６の発問３についての生徒の意見から分かるように、「<u>死ねという言葉を簡単に使ってはいけない。周りの人、支えてくれる人も感謝したいし、その気持ちを忘れてはいけない</u>」と感じる生徒もいた。このことから、生徒の実態に合わせた題材の選択は良かったということができる。

資料６：発問３より



③発問について

今回の題材では、過去無量という言葉がポイントとなる。この過去無量という言葉が表していることを、生徒が身を持って感じるためには、自分が思うことを発表し意見を交流させることにより深まっていく必要があった。しかし、発問１ではその深まりができなかった。生徒たちが自分の考えを発表しやすくするために、「過去無量とはどういうことなのであろう」というように「意味」という言葉を使わずに発問するべきであった。さらに、エンカウンターを生かして、グループではなし合わせれば、もう少し意見は出てきたのではないかと考える。また、８月１日に行われた道徳授業研究会ではこのような実践報告があった。過去無量を生徒に視覚的に実感させるために、パワーポイントを使い一人ずつ先祖を出していき、生徒と共に数を数えていく方法。また、資料を提示する際、「二十代まえでは・・・」までにし、二十代までの人数

【本時　受けつがれていく命　～命のバトン～　】

道徳の授業を展開していく上で、自分の意見を発表したり、相手の意見を１つの考え方だと受け入れたりすることが大切である。そのため、学級の実態に合わせ、エンカウンターによる活動を何度も行い、自分の考えを発表したり、相手の意見を受け止めたりし、心を開いていく姿勢が少しずつできるようにし、一学期最後の道徳の授業で、「受けつがれていく命」を実践することにした。今ある命は、自分だけのものではなく、今まで何万人もの人が命のバトンを受け継いでくれおかげで今の自分がいるのだと言うことを気づかせたい。また、自分と同じように、他人の命も受け継がれてきたとっても大切な命であるということを感じさせる。

②生徒の実態に合わせた導入の工夫

本時では、いのちの教育学習指導案事例集の中から「受けつがれていく命」を行った。この指導案では本来、導入は「リレー競争でバトンに込める思いを発表し話し合う」というものであった。本来、いのちのバトンという詩を使うため、バトンの意義を見つめさせるにはアクションプラン通りの発問が適切である。しかし、自分の楽しいことや好きなことにしか積極的に取り組もうとしない生徒の心を、導入でしっかりとつかむ必要があった。そのため「自分の子どもが生まれるとして名前をつけるとしたら、どんな名前がよいでしょうか」という発問で導入を行った。実際に自分の子どもの名前を考えることにより、親の愛や親からのつながりを感じさせたいと思った。また、導入の段階ですべての生徒が授業に参加をして欲しいと思い発問の工夫を行った。

４　考察

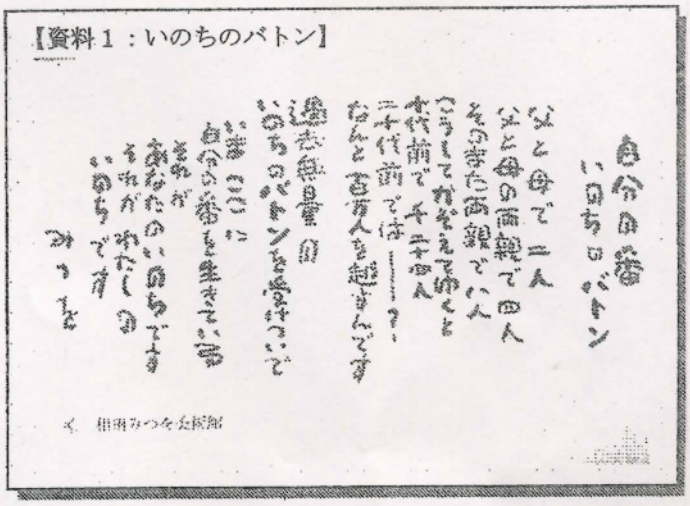
①資料について

資料　詩「自分の番　いのちのバトン」

出典「しあわせはいつも」（文化出版局）

本資料は、自分の「いのち」は自分一人のものではなく、多くの先祖から引き継がれ、自分に引き渡されたものである。自分だけでなく、誰もが同じように「いのち」を受け継ぎ、次へと引き継ぐ使命を負って生きている。この続いてきた「いのちのバトン」を一人でも引き継がなかったら、今の自分はいなかったということが込められている。また、自他の命は過去無量の「いのちのバトン」を受け継がれた、かけがえのない尊いものであるということも詩の後半で表されている。

【資料１：いのちのバトン】



生活アンケートや生徒の実態から、自分が生まれるまでに、たくさんの人がバトンをつなげてくれたおかげで、今の自分の命があることを感じて欲しい。また、自分の命と同じように相手の命も受け継がれている大切なものである。だからこそ相手を傷つけたり、ましてや人の命を奪ってはいけないということを感じて欲しいと願いこの題材を選んだ。

②授業の実践と考察

《導入》

資料２：導入時の授業記録】

T1：今日は、まずみんなにお父さん、お母さんになって生まれてきた自分の赤ちゃんに名前をつけてもらいたいと思います。

生徒：何それ～！！（教室がざわめく）

A男：そんなん分からん！！

T２：急にいわれても困るね。でもちょっと考えてみて。みんなの名前にも両親からの願いが込められていますね。いずれみんなも親になる時が来ます。どんな子に育って欲しいかとか、自分の好きな漢字とか、好きな人を考えながら、男の子と女の子の名前を考えてみて下さい。

B子：自分の名前の漢字を入れるとかあこがれるな・・・。

B男：そりゃー、決まってるだろ。

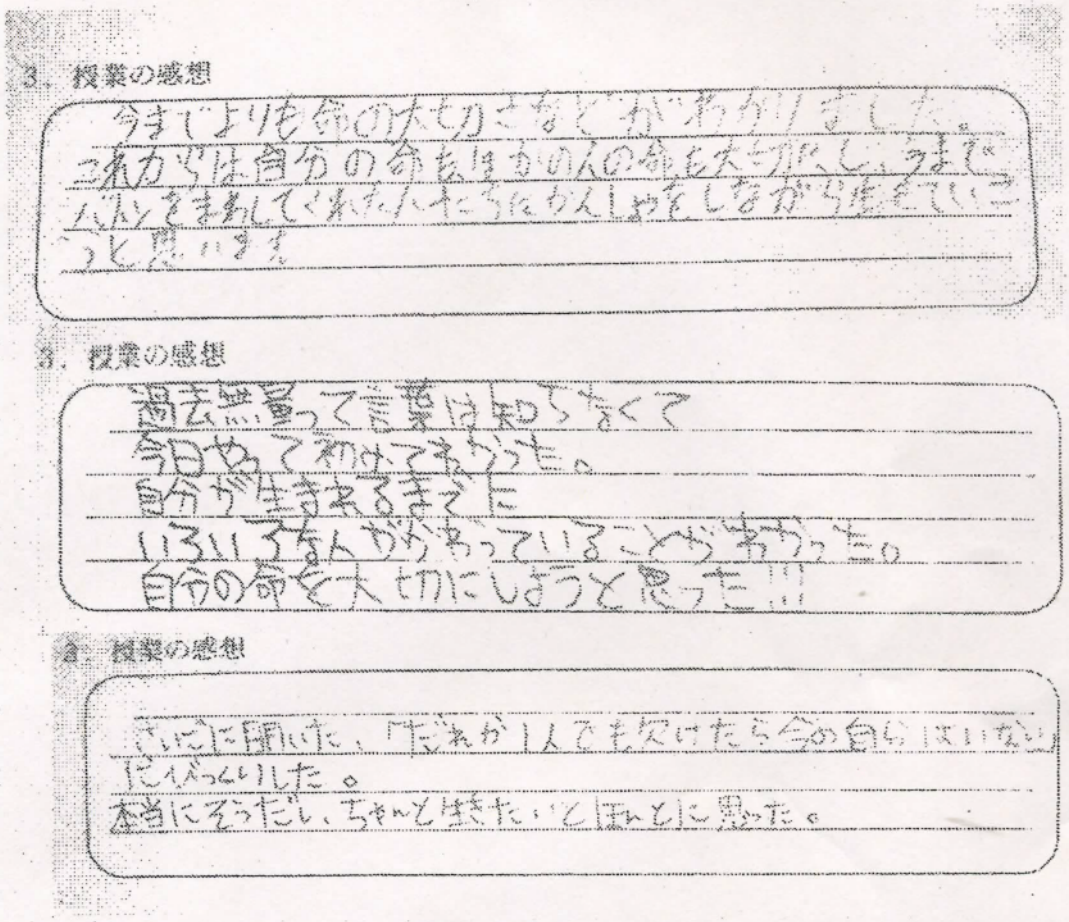
「先生、今日の道徳何やるの？」と授業開始のあいさつを終え、席に座ったA男はいつものように尋ねてきた。他の生徒たちも、本時の道徳の内容に興味を持った顔をしてた。そこで、「今日は、まずみんなにお父さん、お母さんになって生まれてきた自分の赤ちゃんに名前をつけてもらいたいと思います」と提案した。資料２から分かるように、思春期真っ只中の生徒たちは「自分の赤ちゃんに名前をつける」という言葉を聞いて戸惑い恥ずかしいと感じてしまうものであった。しかし、いつも授業を前向きに取り組むことのできないA男やB男は、この提案に興味を示し考える様子が伺えた。また、日頃からあまり教師の言葉に対し反応を示さない本学級の生徒たちであったが、反応を示し、前向きに考えようとする姿が見られた。その姿を見て、生徒の実態に合わせた導入の工夫に手ごたえを感じることができた。その後、ワークシートを回収し、数名の生徒が考えた名前とその理由を教師が発表をした。多感な時期であるため、生徒自身に自ら挙手をさせ発表させることを控えた。全員の生徒がワークシートに、自分で考えた名前を書いていた。ワークシートに書かれた名前には「優」という漢字を使ったものが多く、理由には「優しい子になってほしいから」と書かれていた。その後、「今、みんなに名前を考えてもらいましたが、みんなの両親はわが子を目の前にして、もっともっと願いを込めて考えたに違いあ

を生徒に数えさせる方法である。発問２・３についても、生徒が積極的に意見を言うことができなかったため、深まりがかけてしまった。発問を、例えば「あなたは」ではなく、「筆者は」や「相田さんは」にすることで、生徒たちは発言しやすくなったのではないかと感じた。

④授業の展開について

授業の全体を振り返ってみると、導入の段階で予定以上の時間を費やしてしまい、発問３について深める時間がなくなってしまった。時間配分に気をつけていかなければいけないと感じた。発問３について、一人の生徒の考えしか発表することができなかった。そのため、次の日に学級通信でそれぞれの生徒の考えを掲載した（資料９）。

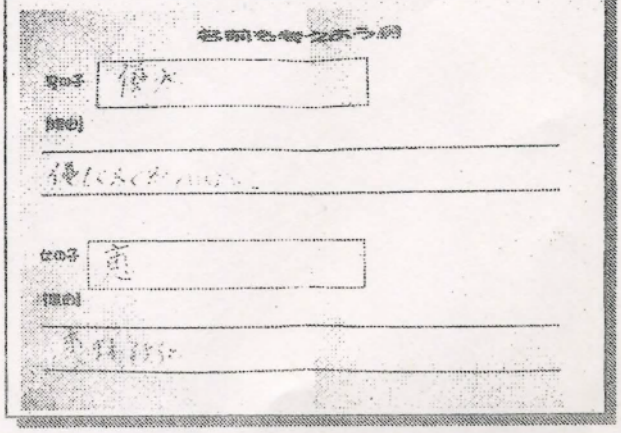
資料７：授業の感想



（１）学級の実態に合わせた導入の工夫について

導入によって、生徒たちの授業の姿勢はとても変わる。それを、４月の学級開きから身をもって感じていた。そのために、まず第一にすべての生徒を授業に参加させたいという気持ちがあった。また、自分の子どもの名前を考えるということを通して、親の愛や親からのつながりを自覚することで命の重さを感じられると考えた。また、命という題材を取り扱うために、終末に向けて重くなっていく雰囲気を、始めは明るく元気に行いたかった。

資料８：名前を考えよう！！



ほとんど授業に参加をしないＡ男やＢ男には、特に自他の命の大切さに少しでも感じて欲しかった。今回の導入で授業を行ったことで、Ａ男やＢ男はいつも以上に授業に参加をすることができた。感想では、「今日は色々なことがわかった。楽しかった。」と書いてあった。また、生徒の授業の感想では、「命や生まれてきた時の子どもの名前とかを深く考えるような授業は始めててだったけど、命について考えることができたし、自分の命は大切ということを実感しました」と書いていた生徒もいた。